第21回

GIVENCHY

今、再びモードの最前線へ

ジバンシィと言えば、あのオードリー・ヘプバーンがミューズであったブランド。〝モードの神童〟と呼ばれたユベール・ド・ジバンシィは、ファッションの真の先駆者であり、新スタイルを次々に生み出し、プレタポルテを確立。時を経て今、リカルド・ティッシが手がける新生ジバンシィは、モダン・シックなモードのステージへと昇華しています

撮影／江口博彦　スタイリスト／橋本早苗　ヘア・メーク／小林 懸〈POOL〉　取材・構成／柳武麻実　デザイン／ファブ

中野香織
服飾史家、コラムニスト。東京大学文学部および教養学部を卒業。ケンブリッジ大学客員研究員も経験。今春より明治大学の教壇に。

永遠なる前衛

ルックスに対して用いられる最高のほめことばのひとつに、「ファビュラス(fabulous)」がある。すてき、なのだがその度合いが、神話や伝説（fable）級のレベル。

没してなお輝きを失わずCMにも起用され続けるファビュラスな女優に、オードリー・ヘプバーンがいる。彼女の存在を神話級にまで高めたのが、ユベール・ド・ジバンシィの服だった。上下が交換可能なセパレーツやワイシャツ地を使ったブラウスなど、オートクチュールに画期的な発想をもたらして「神童」と呼ばれたジバンシィは、'50年代豊満女優の規格を外れるオードリーを「代わり」のいない女神に格上げした。華奢でスレンダーな体型と好相性だった、というよりむしろ、ジバンシィの服の性格が、彼女の内なるパーソナリティと共鳴した、という感じ。自由で伸びやか、茶目っ気もあって、でも貴族的な優雅が芯にある、という人柄と。単に体型ではなく、内面が服に呼応して魅力的に説得力をもって立ち現われて見える時、その人はファビュラス！になるのだなあ……とこのデザイナーと女優のコラボから思い知る。

'95年にユベールが引退するまでには、メンズライン、香水部門でも着々と成功を収め、フレンチシックの大御所というコンサバ寄りのブランドイメージを築き上げてきたように見えるが、'96年にはジョン・ガリアーノ、後任にアレキサンダー・マックィーン、さらにその後はジュリアン・マクドナルド、とむしろ強烈で前衛的なテイストのデザイナーが就任。方向性を模索するような時期が続いたが、2005年からクリエイティブ・ディレクターを務めるリカルド・ティッシが21世紀的なモードの軌道に乗せ始めている。

今春夏に登場する大きな水玉プリントやグラディエーターサンダルなどは、枠にはまらぬ大胆さで人を驚かせつつ優雅でキュート、というパーソナリティの持ち主をファビュラスに引き立ててくれそうである。

中野香織

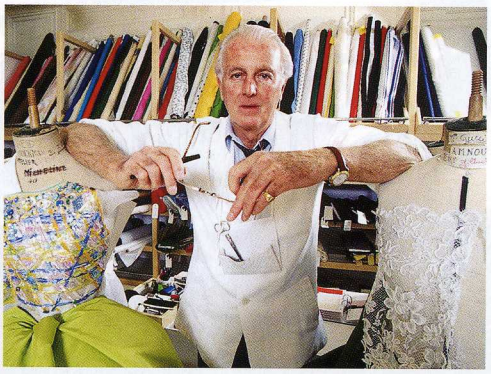
ロゴマークは時代を超えて

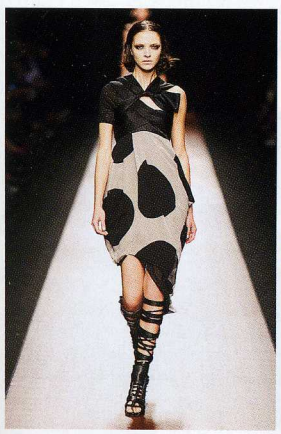
ブランドイニシャルのGを4つ集めた、定番マークの4（フォー）G。'70年に登場以来、数々のアイテムに刻まれて、今季はTシャツ上に動物モチーフとともにグラフィカルにアレンジされてお目見え。Tシャツ¥37,800（ジバンシィ／サードカルチャー）

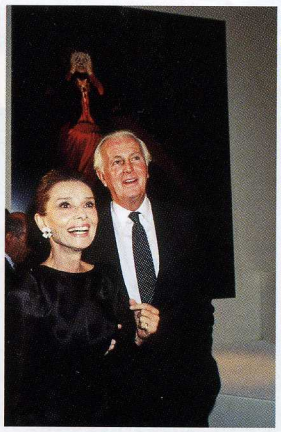
進化するブランドSTORY

1927年生まれのユベール・ド・ジバンシィは、数々の有名メゾンを経て、'52年にジバンシィ社を設立。オートクチュールが主流の時代、20世紀後半は〝カジュアル・シック〟がファッションの潮流になると予見し、当時仮縫いで使用したコットン地の軽量なブラウスやスカートを発表し、話題を浚う。2年後には、高級プレタポルテラインの「ジバンシィ・ユニベルシテ」を発表し好評を博す。その頃、女優オードリー・ヘプバーンと出会い、映画『麗しのサブリナ』『ティファニーで朝食を』などの衣装を手がける。彼女はジバンシィのファッション大使の役目を担う。細いボディ、白鳥のようなネックラインなどの'60年代の新しい美を創り出す。'95年に引退後は、3人の英国人デザイナーが継承。2005年3月から、30歳だったイタリア人のリカルド・ティッシがレディースのオートクチュールおよびプレタポルテ・コレクションのクリエイティブ・ディレクターに就任。新生ジバンシィを担い、力強いコレクションを発表。

SIPA PRESS/amanaimages







SIPA PRESS/amanaimages

伝統と革新の弁証法

〈上〉1992年1月頃のユベール・ド・ジバンシィ。仕事場であるオートクチュールのアトリエにて。〈左中〉1991年10月、パリのパレ・ガレリアにおける、デザイナー生活40周年展に、オードリー・ヘプバーンを招待。〈左〉ブランド創世期から使われているドットモチーフ。コンサバの象徴的モチーフですが、爽やかにも、モードにもと変幻自在。春夏のコレクションでは、ビッグにサイズアップして、ミニドレスで登場しました。